

そして、

地球環境核戦争が始まった

北里環境科学センター
理事長／宇宙生命学者 **伊藤 俊洋**

宇宙から地球を観る練習

人類が初めて宇宙から地球を観たのは、今から56年前のこと。旧ソビエト連邦の宇宙飛行士、ユリー・A・ガガーリンの「地球は青かった、宇宙に神はいなかった」のセリフは鮮烈であった。それから8年後、人類は米国のアポロ計画で月面から送られてきた地球の映像を観ることに、宇宙船地球号の概念を共有することになった。新しい地球文明の誕生を予感させる出来事であったが、歴史はそのようには進化していない。あの時の感動はどこへ行ってしまったのだろう。

我々の生活はあまりに忙しいので、ともすると大切なことを忘却の彼方に追いやってしまう。私は、遙か彼方の宇宙空間からのライブの地球の姿を、常時、世界中の茶の間に送りたいと考え、随所でそれを提言してきた。また、家の庭にミニ太陽系の一部を作り、宇宙から地球を観る練習をしている。ネット販売されているアースボールの南北の極軸に対して23・4度の角度で片側反面を黒く塗りつぶすと、宇宙から地球を観る感覚がわかる。直径40センチのアースボールの場合は、月の直径は11センチ、模型の地球から12センチの位置に浮かんでいることになる。この場合、太陽の直径は4・4センチとなり、およそ4・7センチ離れたところにあ

る。実際の宇宙では、太陽から地球まで光が届くのに8分かかるので、ミニ太陽系では光の速さがバイクの早さ(35センチ/時)くらいになり、光速が実生活の感覚で体感できる。

太陽に対して僅かの傾きを持つことで生じる地球表面の吸収エネルギーの強弱が、地球上に変化に富んだ四季(春夏秋冬)をもたらす機構も良く理解できる。宇宙空間には水も空気もなく、環境温度は絶対零度に近い厳寒の世界なので、我々が宇宙に出かける時、どのような準備が必要か推測できる。

地球は、宇宙の中で極めて特異な惑星であり、水の惑星、大気の惑星、緑の惑星、そして、地球上のすべての生命にとって母なる惑星であることが容易に理解できる。このことは、今、私達が住んでいる地球上の環境が、いかに貴重なものであるかを知ることにもなる。月旅行とか、火星に永住なんてことが、いかに無謀なことかも現実の問題として理解できる。宇宙から地球を観る習慣を身につけることにより、地球上で起こっている生命現象の本質が見えてくるし、「地球環境核戦争」という概念も身近になってくる。



夜空に浮かべたアースボールに灯を当てて、宇宙から地球を観る感覚を体験